

## 海外武者修行のすすめとひとり旅の体験（3）

近藤節夫

### 1.1. ひとり旅を決断した胸のうち

東京オリンピックも終わりお祭り騒ぎが一段落したころ国内に漂う虚脱感とは裏腹に、国際的にはベトナム戦争は激化の一途をたどり、中国の核実験成功のニュースは、国際情勢の緊張感を一気に加速させていった。まもなく中国国内では文化大革命が始まり、それが契機となり中ソ関係、米中関係は益々冷却化していった。そして、ベトナム戦争は米空軍が一方的に北爆を開始するという極めて緊迫したムードに包まれてきた。

学生時代に書生っぽい純粋な論理と行動力で真剣にベトナム反戦運動に参加したこともあった私は、耳目に入るベトナム関連のニュースに心のおののきを感じざるを得なかった。そのころの私は日常の仕事に馴染めず、テレビ画面でシュプレヒコールをあげる学生たちのデモ行進をただぼんやりと見つめているより仕方がなかった。しかし、行動的な若者のほとぼしる熱気は私の「若き血」をかきたてた。その当時鉄道会社の駆け出し経理マンだった私は、毎日机に座りながら単調な伝票整理をすることだけが唯一の仕事だった。ついに私はじっとしていることが出来ず、あるとき上司にベトナムへ行ってみたいので有給休暇をもらいたいと申し出た。啞然とした上司はすぐ私を近くの喫茶店へ連れ出し「いまの仕事が気に入らないのか？」とか、「戦争中で危険なベトナムなぞへなぜ行かなければならないのか？」とか、陳腐な質問を繰り返しては私に翻意を迫った。なんだか押し問答を繰り返しながら「若いときだけにしか実行出来ない夢を実現してみたいのでぜひ認めて欲しい」と必死になって懇願し、最終的にはもし許可してくれないのなら会社を辞めてでもベトナムへ行く覚悟であると生意気にも上司に対して最後通牒を突きつけてしまった。

その場では上司は私の願いをしばらく預らせてくれといい、私の申し出から1週間後に私の権利行使を容認してくれ、そのうえ私の危険な壮途を激励してくれた。

いま冷静にその時代を振り返ってみると上司に思いがけない心配をかけたことを申し訳なく思っている。その後その上司は私のひとり旅に対する心強いシンパになってくれた。しかし、その当時仮にシチュエーションが変わったとしても私はひとり旅を強行したように思う。僭越であるが、私のベトナム反戦運動にかける熱意と意気込みは学生時代の60年安保闘争以来連綿として尽きず私の体内に渦巻いていたからであり、現状を打破してとにかく外へ出なければ将来必ず悔いを残すに違いないと考えたからである。こうして私は天下晴れてひとり旅の計画を具体的に進めていくことになった。

### 1.2. 初めての海外ひとり旅

1966年の暮れ私は高まる興奮と若干の不安を胸に機上の人となった。その2年前に海外渡航が自由化されたとはいえ、まだまだ海外へ出かける自由人はごく一部の限られた人たちだけであった。飛行機に乗ったのも初めてだった私は、昂揚した気分を抑えきれず機内でも好奇心旺盛で、隣席の外人さんカップルと話し続けている間にバンコックへ到着してしまった。

この最初のひとり旅で私は5カ国を訪れたが、あらかじめテーマを持って旅をした混迷するインドネシアと戦時下の南ベトナムについて当時を偲びながら見聞行動録を紹介してみたい。

到着の翌日バンコックから鈍行列車に乗り山田長政ゆかりの町アユタヤへ向かった。ここで帰省中のタイ空軍の軍人さんと知り合い、思いがけず軍人さんの家庭へ招かれ一家総出で歓待され楽しいひとときを過ごした。タイは初めて訪れた外国だっただけに見るものみな物珍しく、また親日的な田舎の人々から温かいもてなしをうけ温かいホスピタリティーの一端に触れることができ素朴なタイがすっかり気に入り、いい思い出を胸にタイを離れた。

しかし、この旅行で一番行ってみたかったインドネシアと南ベトナムに足跡を印したとき、思いもよらない破天荒なショックがタイの牧歌的な愉悦情緒をガーンと吹き飛ばし、一気にどん底へ突き落とされてしまった。

## 1) 破産寸前のインドネシア

首都ジャカルタに飛んだ夕刻、空港からホテルへ向かう途中薄暗い道を徐行しだしたタクシーの運転手からねちねちと闇レートで両替の誘いがあった。生返事をしているうちにタクシーは真っ暗闇のスラム街の露地で突然停まった。真っ暗闇の中をどっと群がってきた住民に車内を覗かれたのが、なんとも薄気味悪くいや～な気分がした。ふてぶてしく悪党づらした運転手の術中にまんまとはまってしまったのもシャクの種だった。両替しなければ梃子でも動かないと高をくくっている雲助野郎のあくどい脅しに兜を脱ぎ、不承不承US100ドルを現地通貨ルピアに両替させられてしまった。不愉快な気分になり一刻も早くその場を逃れたかった。

私は、学生時代からインドネシア独立の成り立ちに関心があり、前もってインドネシアの政治、経済について調べていた。独立の父といわれたスカルノ大統領の業績について栄光の側面だけしか目を向けなかったのは、スカルノ賛美の日本のマスコミ論調と私の浅学による視野の狭さのせいであったが、すでに実態はスカルノ政権自体、貧困、インフレ、失業者、個人的スキャンダルなどが表面化してその基盤は風前の灯だった。社会主義政権を標榜するスカルノは第3世界のリーダーとしてバンドン会議を主催し、北京・ジャカルタ枢軸を謳い中国との密接な関係をアピールして社会主義による理想国家を建設すると全世界へ向けて公言していた。しかし、その経済水準はアジアでも最低レベルにあり、国内

では政治情勢、社会情勢ともに行き詰まり、首都ジャカルタ市内には失業者の群れが溢れ、スカルノ大統領の理想とは裏腹に国家全体がパニック状態で破滅寸前という印象を持った。

## 2) ジャカルタで強盗に襲われる

ジャカルタの治安の悪さは、旅行前に商社の先輩からもくわしく聞かされ、ここだけは前もって高級で治安がしっかりしているホテルを予約しておくように強くアドバイスされていた。私は身分不相応にも周囲を威圧するような最高級の「ホテルインドネシア」を3泊分予約した。日本からの戦時賠償で市内の目抜き通りに建てられたこのホテルは、確かに警備はしっかりしていたが、外部から地元民を寄せ付けぬほど警備に気を遣っていた。しかし、これでは私にとってインドネシアに来た意味がない。もっと土地の人々の中に入ってかれらと近付きにならなければ、インドネシアの実態や、スカルノ体制の本質どころか、その片鱗すらわからないままにインドネシアを去ることになりかねない。

翌朝ホテルのベランダから周囲の風景を見回しているうちにいつのまにか「夢の陥穽」に落ち込んでしまった。私の脳裏にはこどものころの南洋一郎の世界や、山川惣治の「少年王者」のジャングルから連想する南方に対するほのかなノスタルジアがあったが、ベランダから見える原風景、椰子やゴム林の間に点在する赤レンガの屋根瓦の家々はまさに遙かなる南洋への漠然としたイメージを掻きたててくれるには充分過ぎるインパクトだった。私はそこへ行ってみたいくなり、こどものように警戒心もなく惹かれるようにホテルの裏手の農道を歩いて行った。前夜の苦い経験からすればもう少し身の回りに注意を払うべきであったが、ノスタルジアに陶醉していた私は無頓着にも鼻歌を歌いながら田んぼの畦道を歩いていた。と、そのとき背後からつけて来た若い裸足の男に突然馬乗りになられ左腕を掴み上げられてしまった。とっさのことで呆然としている隙に左腕から腕時計を強奪されさっと逃げ去られてしまった。血気盛んで脚力に自信のあった私は、しばらくしてわれに戻ると「この野郎！」とばかりすぐ後を追いかけてやろうと思った。しかし、その瞬間周囲でニタニタしながら私が襲われた一部始終をじっと眺めている不良っぽい男どもを見て、下手をすると再びかれらにも襲われる恐れがあると観念して追跡するのを諦めた。興奮のあまりホテルで警察官にまくし立てた私の剣幕に押されたのか、ホテルではその日再び外出しようとする私にセキュリティーの若い男とスクーターをつけてくれた。

陽が落ちてセキュリティーと別れた私は、ひとりジャカルタのドヤ街に入り込み、土産店で民芸品の値引き交渉をしていた。すると次第に店主が威圧的になり、そのうち脅迫まがいの値決めにも私も後へ退けなくなってしまった。店には近所の人相の良からぬ野次馬もやってきて周囲で囃し立てる。辺りも暗くなり薄暗い店先の交渉はあまり気持のいいものではない。最後には向こうの言い値で買わされ逃れるようにベチャ（人力車）で戻ってきた。アユタヤのほんわかムードも吹っ飛んでジャカルタの治安の悪さにへきへきした私は、翌日思い切って車を雇い郊外のボゴール植物園へ東洋一の大睡蓮を見に行った。その帰途

1 台の乗用車が道路上で炎上するハッピングに出くわして被害者を警察まで搬送する大役を仰せつかってしまった。結果的にはそのボランティア行為を感謝され、バナナ畑の中にある警察署長の自宅へ招かれ家族と近所の人たちと一緒に「幸せなら手をたたこう」を歌いながら楽しいひとときを過ごした。

ジャカルタ市内は貧困が大きな社会問題となり、スカルノがいう社会主義のバラ色の理想と現実とは大きくかけ離れていた。スラムがひしめきあう貧しい大都市と比較的余裕のある郊外の農村地帯との格差も実感した。実態をよく見てみるとマスコミの報道する虚像と市民生活の実像には厳然として大きな落差があることを知り、現場に臨みその格差を見抜く嗅覚が必要であることも知った。

このスカルノ体制の末期にインドネシアで味わった峻烈な体験が、30年のときを経て類似した末期的スハルト体制の崩壊を私に予測させる洞察力の源泉となった。

### 3) 緊迫感漂うサイゴン市内

サイゴン・タンソンニュット空港に降り立った途端トイレを尋ねただけでまず殺気立った米黒人兵に一喝された。あの顔のひきつった米兵のふてくされたような態度が忘れられない。私が訪れた1967年1月、ベトナム戦争は泥沼化してこの先いつ戦火が止むか見当もつかなかった。米軍は本土から続々と兵士、武器を送り込み、アメリカのカイライ政権となった南ベトナム政府はアメリカの援助を当てこんだ物量作戦で北ベトナムや、ベトコンの拠点を空爆するか、奇襲攻撃をかける以外に手段を選ばなかった。米空軍の北爆とベトコンによる反攻……。都市部といわず地方といわず、ベトナム全土は戦場と化し死傷者の数もうなぎのぼりに増加していった。米軍の戦死者も激増し、ベトコンによるテト攻勢のあと厭戦から反戦の機運が生まれ、アメリカ本国の戦争帰還者の間から自然発生的に「花はどこへ行った」やジョン・バエズの反戦フォークソングが唄われだした。私が戦争のさなかにベトナムを訪れたのは、そのような最も戦争の激しい時代であった【先日元ベ平連の作家小中陽太郎氏から丁度この頃ハノイに滞在しておられたとうかがった。どうやって北ベトナムへ入ったのだろうか？またお会いしたら詳しく尋ねてみたい】。このような戦時下の背景をもっと理解した行動をとってれば、兵士の気に障るようなことはなかったであろう。明日をも知れぬ身の兵士にとってカメラをチャラチャラぶら下げて歩き回っている観光客風情がよほど癪に障ったのだろう。

私は恫喝された後、おんぼろリムジーンで市内中心部のバスセンターにたどり着いたが、そこから至近距離のホテルまでタクシーで市内を一回りされ法外な値を吹っかけられた。戦時下の民衆の心の荒廃ぶりを生々しく実感させられた。サイゴン市内は完全な戦時状態にあり、米軍兵士、MP、南ベトナム軍兵士の軍服姿が一際目につく。砲弾が撃ち込まれた弾痕、有刺鉄線とバリケード、走り回る軍用車、鳴り響くサイレンの音、けたたましい救急車の音、サーチライトの光線、ホテル内は停電と断水、そして時折聞こえる被弾の音

などでおちおち眠ってられない。

#### 4) アメリカ軍歩哨に銃口を向けられる

日中サイゴン市内を散策中にうかつにもまた不注意な行動をとってしまった。堡塁で警備する米軍歩哨に対してカメラを向け、撮らして欲しいとスマイルとウェーブでサインを送った途端、その歩哨は私に‘Get away!’と叫んだのだが、そのままカメラを構えていたところ銃の引き金に手をかけて威嚇された。「わあ！やばい！撃たれたらお終いだ！」いっぺんに目が覚めた。ここは厳しい戦場の真っ只中であるということを改めて思い知らされた。

戦争の実像を目の当たりにして益々ベトナム戦争の早期終結を願う気持を強める一方でほうほうのいでサイゴンから逃げ出した。私がサイゴンを去ってしばらく後、市内ではベトコンによる過去最大規模のテト攻勢が仕掛けられ市民の間に多数の犠牲者を生んだ。更にその1週間後タンソンニュット空港は、全ての民間航空機の発着を停止した。

今年の3月、私は34年ぶりに再びサイゴン（現ホー・チ・ミン）を訪れた。空港境界の雰囲気から市内へ通じる一般道の周辺にも当時の面影は見られない。戦争を知らない若い世代には感傷も感慨もないのが気になった。私は市内中心部にある旧大統領官邸の前に立ち、ベトナム戦争が終結したときのテレビ画面を思い浮かべ感慨無量の気持を抑えることが出来なかった。1975年4月30日、その日誇らしげな北ベトナム正規軍がサイゴンへ入城してこの大統領官邸屋上に北ベトナム国旗を掲げた。長かった戦争に終止符がうたれた正に感動的な一場面であったのだ。

思えば、このひとり旅が私に初めて現実的に世界への扉を開き、国際情勢の実像を教えてくれ、その後に私自身が生きていくうえでの大きな指針となった。

つづく